



第3回カラフルフォトリンピック パートナー企業様向け資料

高校生と障害児が社会を動かすダイバーシティ写真コンテスト



COLORFUL
PHOTOLYMPICS

一般社団法人カラフルフォトリンピック



目次

●はじめに

1. 目次
2. カラフルフォトリンピックとは
3. 当法人について

●社会課題と目的

4. カラフルフォトリンピック立ち上げの想い
5. 解決したい3つの社会問題
6. 解決策

●活動内容と実績

7. 年間スケジュール
8. 前年度の実績（参加人数・協賛企業・作品展・メディアなど）

●協賛プラン

9. 協賛プラン（種類・特典・費用）
10. 予算案

●将来展望と学び

11. カラフルフォトリンピックの「独自の価値」
12. 今後の展望
13. 高校生が得た学び



カラフルフォトリンピックとは

カラフルフォトリンピックとは、
写真好きな高校生が障害のあるキッズモデル（カラフルモデル）を撮影する、
ダイバーシティ教育を目的とした写真コンテストです。

【主催】

東京工芸大学

一般社団法人カラフルフォトリンピック

KOGEI


COLORFUL
PHOTOLYMPICS

当法人について

法人名 一般社団法人カラフルフォトリンピック

所在地 〒135-0045 東京都江東区古石場3-11-17

電話番号 080-6078-8787

設立 2025年4月

活動 カラフルフォトリンピックの企画、運営、作品展開催

理事 代表理事 内木 美樹（株式会社華ひらく 代表取締役）
理事 上田 耕一郎（東京工芸大学芸術学部写真学科教授）
理事 勝倉 峻太（東京工芸大学芸術学部写真学科教授）
理事 福島 治（東京工芸大学名誉教授）

略歴 2024年 4月 カラフルフォトリンピック立ち上げ
8月 第1回カラフルフォトリンピック 撮影会開催
12月 第1回カラフルフォトリンピック 授賞式・作品展開催
2025年 4月 法人設立
8月 第2回カラフルフォトリンピック 撮影会開催
12月 第2回カラフルフォトリンピック 授賞式・作品展開催

カラフルフォトリンピック立ち上げへの想い

はじめまして。（一社）カラフルフォトリンピック代表の内木美樹と申します。

私は、重い障害のある長男（12）の母として、日々の生活の中で「障害があっても堂々と生きられる社会をつくりたい」という思いを強くしてきました。この思いを形にするため、2021年に障害のある子どもたちのモデル活動「カラフルモデル」を立ち上げ、2024年からは東京工芸大学と協働し、高校生がカラフルモデルを撮影するダイバーシティ写真コンテスト『カラフルフォトリンピック』を開始しました。

障害児の親として歩む中で、私は二つの大きな気づきを得ました。一つ目は、障害のある子どもたちから学べることは非常に多いということです。彼らのペースや方法に合わせればコミュニケーションは必ず成立し、丁寧に伝えれば互いに理解し合える。この「相手に合わせる姿勢」は、障害の有無を超えて、どんな人間関係でも本質的に大切な力です。

二つ目は、障害者と健常者の接点が驚くほど少ないという現実です。学校も職場も分かれ、日常生活で出会う機会はほとんどありません。どれほど学びや可能性があっても、そもそも出会わなければ理解は決して生まれません。この「断絶」こそが、偏見や先入観を生む土壌になっています。

だからこそ私たちは、支援学級がなくなり、障害児との接点が一気に減る高校生年代に「出会い」と「学び」の機会を届けたいと強く思いました。障害のある子どもたちの魅力や、人としての強さに触れ、自分の価値観が揺さぶられるような体験をつくること。それこそが、先入観を減らし、誰もが生きやすい社会をつくる最初の一步だと確信しています。





1

高校以降に失われる「多様性との接点」

中学校までは支援学級のある学校が多く、日常的に障害のある同年代と関わる機会があります。しかし高校進学を境に、「普通校」と「特別支援学校」に分離され、校内には似た学力・価値観・家庭環境の生徒だけが集まるようになります。その結果、ちがいのある人と実際に関わりながら多様性を学ぶ機会が、高校以降ほぼ失われているのが現状です。

2

障害児者に「活躍の場」がない現状

障害のある人と直接関わることで、価値観が広がり、アンコンシャスバイアスに気づくなど、多くの学びが得られます。しかし日本では、障害のある人との接点自体が非常に少ないため、「障害がある＝何もできない」という誤った認識が、知らないがゆえに広がっています。その結果、本来は社会の中で役割を果たせる人たちが、活躍する場を持っていないという課題が生まれています。

3

分離が続く社会構造

内閣府「令和7年版 障害者白書」によると、日本の障害者数は約1,200万人とされ、15年前と比べ約1.5倍に増加しています。国連からは、障害のある人を隔離せず、地域社会で共に生きる仕組みづくりについて繰り返し勧告を受けています。しかし現実には、特別支援学校やグループホームの建設に対し、地域住民から反対の声が上がることも少なくありません。障害のある人と共に生きる経験の不足が、社会の分離を固定化させています。

解決策：カラフルフォトリンピック

- ミッション①（高校生）：やさしい人材の育成
②（障害児者）：新たな価値の確立
③（社会）：多様性やインクルーシブに理解ある社会の実現










カラフルフォトリンピックの年間スケジュール (第3回大会予定)

- 3月 ● 企画会議開始
- 4月 ● パートナー企業募集開始
- 5月 ● 高校生カメラマン募集開始
- 6月 ● 障害児キッズモデル募集開始
- 8月 ● 撮影会 (8/18) 予備日 (8/20)
- 9月 ● 応募作品 (写真・作文) 受付締め切り
- 10月 ● 審査会
- 11月 ● 授賞作品発表
東京工芸大学にて作品展
- 12月 ● 授賞式・セレモニー (12/5)
- 1月 ● 首都圏のショッピングモールで作品展巡回予定
- 2月 ●



第2回開催の実績

	第1回	変化	第2回
 高校生 カメラマン	13人	+7人 	20人
 障害児	10人	+2人 	12人
 協賛企業	12社	-2社 	10社
 協賛金	310万円	-105万円 	205万円
 メディア掲載	0回	+4回 	4回 東京新聞 (3回) フジテレビ (Live Newsイット!)
 作品展	2回	+2回 	4回

トップパートナー（100万円）

目玉となる特典



- 1 カラフルフォトリンピックのロゴの使用
- 2 当コンテスト印刷物に貴社名掲載
- 3 当コンテスト公式ホームページと、授賞式・セレモニー・作品展で展示されるパネルに御社名とロゴ（超特大）掲載
- 4 御社名受賞作品に加え、入賞作品の中から最大2点、主催者から提供された撮影会の様子の写真を、「広報」と「広告」として1年間起用
- 5 貴社名のついた賞を新設（審査会で作品を選んでいただきます）
- 6 カラフルモデル1名までを最長1年間無料で起用（撮影は1回）
- 7 障害児から学ぶダイバーシティ・コミュニケーション研修（90分）



※ 撮影にかかるモデルや保護者の交通費、宿泊費は別途かかります。

※ 広告としてご利用可能なお写真は各企業でお選びいただけますが、撮影者である高校生から承諾を得た作品に限ります。

※ ダイバーシティ・コミュニケーション研修にご受講いただける最大人数は20名様までです。

プレミアムパートナー（50万円）

目玉となる特典



- 1 カラフルフォトリンピックのロゴの使用
- 2 当コンテスト印刷物に貴社名掲載
- 3 当コンテスト公式ホームページと、授賞式・セレモニー・作品展で展示されるパネルに御社名とロゴ（特大）掲載
- 4 御社名受賞作品に加え、入賞作品の中から最大2点、主催者から提供された撮影会の様子の写真を、「広報」と「広告」として1年間起用
- 5 貴社名のついた賞を新設（審査会で作品を選んでいただきます）
- 6 障害児から学ぶダイバーシティ・コミュニケーション研修（90分）



※ 広告としてご利用可能なお写真は各企業でお選びいただけますが、撮影者である高校生から承諾を得た作品に限ります。

※ ダイバーシティ・コミュニケーション研修にご受講いただける最大人数は20名様までです。

ゴールドパートナー (30万円)

目玉となる特典



- 1 カラフルフォトリンピックのロゴの使用
- 2 当コンテスト印刷物に貴社名掲載
- 3 当コンテスト公式ホームページと、授賞式・セレモニー・作品展で展示されるパネルに御社名とロゴ（大）掲載
- 4 御社名受賞作品に加え、入賞作品の中から最大2点、主催者から提供された撮影会の様子の写真を、「広報」として1年間起用
- 5 貴社名のついた賞を新設（審査会で作品を選んでいただきます）
- 6 障害児から学ぶダイバーシティ・コミュニケーション研修（60分）



※ ダイバーシティ・コミュニケーション研修にご受講いただける最大人数は20名様までです。

シルバー協賛（10万円）

- 1 カラフルフォトリンピックのロゴの使用
- 2 当コンテスト印刷物に貴社名掲載
- 3 当コンテスト公式ホームページと、授賞式・セレモニー・作品展で展示されるパネルに御社名とロゴ（中）掲載
- 4 金賞作品と、主催者から提供された撮影会の様子の写真を、「広報」として1年間起用

ブロンズ協賛（5万円）

- 1 カラフルフォトリンピックのロゴの使用
- 2 当コンテスト印刷物に貴社名掲載
- 3 金賞作品と、主催者から提供された撮影会の様子の写真を、「広報」として1年間起用



第3回大会予算案

※ 当法人は全役員無報酬で活動しております。

項目	金額	備考
謝礼費	603,600	モデル、審査員、ボランティア
外注費	1,220,880	オフィシャル写真、展示業者、デザイン、企画・プロデュース
通信費	200,000	切手、レターパック、携帯通信料
地代家賃	240,240	レンタルストレージ
消耗品費	165,000	撮影小道具、カメラ防水カバー
広告宣伝費	100,000	フライヤー、はがき、名刺印刷
旅費交通費	100,000	
接待交際費	80,000	セレモニー用菓子、賞品、贈答品
支払手数料	70,000	振込手数料、決算代行
租税公課	75,000	税金、印鑑証明書、登記簿謄本
新聞図書費	5,000	
保険	15,000	
未払金	990,000	
合計	3,864,720	

主催 (100万円)

東京工芸大学

シルバー (10万円)

足立成和信用金庫様

トップ (100万円)

西武信用金庫様

ブロンズ (5万円)

東栄信用金庫様

プレミアム (50万円)

未定

協力

撮影会場：和洋学園様

カメラ：GOOPASS株式会社様

賞品：株式会社ワコム様

額装：有限会社レイテック様

作品展会場：未定

ゴールド (30万円)

株式会社
昭栄美術様

三機工業
株式会社様

1

教育価値

障害児との「直接的なふれあい」を通じた、実践型の多様性教育

カラフルフォトリンピックでは、障害児を一人の表現者として尊重しながら関わる体験を重視しています。高校生は、言葉や知識だけでは理解しきれない「ちがい」と向き合い、戸惑い・発見・喜びを含めた生きた多様性を体感します。これは教室内では得られない、実践型のダイバーシティ教育です。

2

社会問題解決

高校生と障害児が「当事者」として参加する、共創型の社会課題解決

多くの社会貢献活動では、「支援する側／される側」が固定されがちです。しかしカラフルフォトリンピックでは、高校生と障害児がともに「主体」となり、一つの作品をつくり上げます。そのプロセス自体が、偏見や無理解を溶かし、共に生きる社会のあり方を実体験として示す取り組みです。

3

企業価値向上

CSRにとどまらない、共感と誇りを生む企業参画

企業はパートナー契約を通じて、単なる社会貢献ではなく、「次世代教育」や「共生社会の実現」に直接関わることができます。また、取り組みの背景や成果を共有することで、従業員の共感やエンゲージメント向上にもつながります。企業の姿勢そのものが、社内外に伝わる価値創出の機会です。

今後の展望

① 参加者・パートナーの拡大



高校生カメラマンの人数を段階的に増やし、より多くの方に障害児とのふれあいの機会を創出します。あわせて本取り組みの趣旨に共感するパートナー企業の拡大を目指します。

② 地方展開と地域連携の強化



首都圏に限らず、地方都市での撮影会の実施や、作品展開催を通じて多様性体験の機会を全国に創出します。地方の自治体・教育機関・地元企業との連携も視野に入れていきます。

③ 社会的インパクトの拡大



写真という表現を通じて、障害児一人ひとりの魅力や価値を可視化し、障害児を「助けられる存在」ではなく「学びのきっかけになる存在」として位置づける新しい視点を広めています。高校生・企業・地域社会へと波及させ、多様性理解が「机上の知識」ではなく「実体験に基づく実感」として根づく社会を目指します。

カラフルフォトリンピックで学んだ最も大切なことは、知らないから偏見を抱き、誤った情報を信じてしまうということです。こうした交流の機会が増えれば、障がいの有無に関わらず誰もが暮らしやすい社会につながると思います。

第2回 金賞 井本 夏樹さん

この経験は私にとって、写真の技術だけでなく、人と人とのつながりや、思いやりの心を育むための貴重な機会となりました。

第2回 銀賞 須藤 友珠希さん

大人になると、知らず知らずのうちに偏見や先入観を持ってしまうことがある。障がいの有無で人を分けてしまう社会の現実を思うと、子どもたちの関わり方は、私たちが忘れてしまった大切なものを思い出させてくれた。

第2回 上田 耕一郎賞 満重 佑真さん

この経験を通して、（中略）障がいについて理解しようとする姿勢が大切だと思いました。特にそう感じたのは、モデルさんの車いすを階段で運んで初めてその重さを知ったときです。これは障がい者の毎日の苦勞のほんのわずかにしか満たさないが、自分から率先してこのコンテストに参加して、手伝おうと思わなかったら体験できなかったことだと思います。

第2回 西武信用金庫賞 小林 櫻子さん

